

孤独な声——代補としてのアメリカ短編小説

司会・講師 森本 光（和歌山大学）
講師 大松 智也（京都大学・院）
講師 西山 由佳（関西学院大学・院）
講師 パク ジョンファン（神戸大学・院）

小説という形式では長編（novel）が幅を利かせ、短編（short story）はどちらかと言えば周縁的な形式とみなされてきた。批評や研究においても、短編小説は長編よりも扱われることが少ない傾向にある。しかし、だからといって短編が劣ったジャンルだと言えるだろうか。短編小説が長編に匹敵する豊かな声を響かせ、読者の心を掴むこともある。まずはそのような短編の表現力にあらためて光を当てることが本シンポジウムの主旨である。長編作家や長編小説を研究する場合でも、短編小説を分析することで作家像が更新されたり、短編を通して見ることで長編小説に別の視野や切り口が見つかったりすることもある。また、短編を専門に書き、長編作家と肩を並べるほどの文学性を持つ作家もいる。短編小説はときに長編との関係を脱中心化あるいは転倒する。周縁でありながら、それなしでは成り立たないアメリカ文学史における短編小説の代補性を浮かび上がらせたい。（森本光）

連続しない比喩の川 ——John Cheever の“The Swimmer”における神話と郊外

アメリカの郊外地域を舞台にした短編で名高い John Cheever の代表作、“The Swimmer”（1964）は、主人公が滞在先と自宅の間に点在するプールを「川」とみなして家まで泳いで帰る物語である。従来この作品は神話的作品との比較によって分析されることが多かったが、作者はこの類の批評にたいして再三異議を唱えていた。また近年では郊外地域の時代的・地理的文脈に注目した読解が中心となり、作中の神話的要素は等閑視されている。しかし、主人公が自らを “a legendary figure” と規定することからも窺えるように、本作を神話との関連において読解することは現在でも一定の説得力を持っているように見える。そこで本発表ではまず、彼が「川」を作り出す際の操作に注目してこの「川」の神話的機能を明らかにする。そして、郊外に現れた「川」が物語を通じて変質してゆく過程を読み解くことで、神話が郊外の時代的・地理的文脈ととり結ぶ関係、ならびに作者が示した神話批評への反感について考察する。（大松智也）

Austen 的な権威風刺と権力解体のアイロニー
——Karen Tei Yamashita の“Giri & Gaman”における模倣とずらし

Karen Tei Yamashita の *Sansei and Sensibility* (2020) 第2部には、Jane Austen の作品を参照しながら日系アメリカ人の視点で再構築した物語が収録されている。“Giri & Gaman”は、Austen の *Pride and Prejudice* を参照しながら、1960年代の「ポストキャンプ」を舞台に日系2・3世の世代間記憶の断絶と、白人社会の権力的まなざしを批判的に描く。本作に登場する Benihana 夫妻は、子ども達に日系収容所での経験を語らぬまま生きる日系2世であり、彼らの発言にはジャズや442連隊といった文化的記号を通して沈黙の内側に潜むトラウマ的記憶が示唆される。一方で、Austen 作品に登場する権威主義的な登場人物を模倣した Miss C. Borg と Mr. Collins は、東洋をステレオタイプ化し日系アメリカ人を「他者化」する白人社会を象徴する。本発表は、Yamashita による参照を、Austen の階級社会への風刺をアメリカ内部で抑圧されてきた日系アメリカ人の経験へと翻訳する試みとして読み解き、この模倣とずらしによって再構築される語りの形式が白人中心的文化の優位性を解体する可能性を検討する。(西山由佳)

現実から切り離されたテープ
——Philip K. Dick の“The Electric Ant”における唯我主義の Lacan 的分析

Philip K. Dick の“The Electric Ant” (1969) は、彼の作品群の特徴となった複数の主題——まがい物の存在、虚偽の現実、そして唯我論的な自我——を探究している。本作は、人間の視点から「他者」を考察する Dick の長編とは異なり、立場を逆転させて「他者」の側から人間性の本質を考察している点が特徴である。主人公の Garson Poole がある日、自分が有機ロボット(organic robot)であることを発見するという、Kafka 的事態に直面し、それから逃れようとして、知覚のための穿孔テープ(micro-punched tape)そのものを切断するという行動に出る。しかし「自らの現実から脱却する」という試みは、最終的に Poole の現実とその世界すべてが崩壊するという結末によって、その不可能性がかえって強調される。本作はアイデンティティと現実に関する卓越した洞察を提示しており、とくに Jacques Lacan 的観点から読むことでその洞察の鋭さが際立つ。Dick の作品に通底する「現実の仮象性」への執着、人間存在や身体への嫌悪と憧憬が矛盾する形で併存する点——そしてそれらがしばしば、存在の成立段階からしてすでに構築され、操作され、歪められているという描写——は、人間存在を貫く無意識的な支配力、そしてアイデンティティと主体性の脆さに対する Dick 自身の深い直観的洞察を示唆している。(パク・ジョンファン)

レイモンド・カーヴァーの贅肉
——作家の身体、テーマ、スタイルについて

短編で評価される小説家たちがいる。アントン・チェーホフやエドガー・アラン・ポーだが、レイモンド・カーヴァーもそのひとりだ。短編作家とはいっていいどのような存在だろうか。本発表では贅肉という言葉でカーヴァーの資質について論じる。カーヴァーの作品における脂肪や食などの要素についてはこれまでにも論じられてきたが、詩学や修辞の次元にまでは届いていないように思われる。贅肉という日本語の比喩的な意味の広がりは、身体だけでなく文体や貨幣というトピックを招き寄せ、なおかつ「短編作家とは何か」という問いへの手掛かりも与えてくれる。『頼むから静かにしてくれ』（*Will You Please Be Quiet, Please?*）を中心に贅肉という視点で読み解き、カーヴァー文学の代補的な論理に迫りたい。(森本光)